

## 31 飯島魁と近代寄生虫学の系譜

寺 畑 喜 朔

日本における近代寄生虫学の開拓者は飯島魁である。

飯島は浜松に生まれ(一八六一)長じて東京大学理学部生物学科へ進み、第一回卒業生となり(一八八二)、准教授に任命される。在学中の前半は米人教師モース、後半はライプチヒ大学のロイカルトのもとで留学を終えたホイットマンについて学んだ。飯島は一八八二年動物学修学のため、ロイカルトのもとへ留学する。

一八八四年陸軍省から留学を命ぜられた森林太郎は飯島と同宿する。鷗外の『独逸日記』によれば『隣房には飯島魁住めり、千葉の人にて動物学を修む』とある。ライプチヒ大学で『淡水産渦虫類の研究』でドクトルの学位をうけ、森との交遊も半ばにして帰国する(一八八五)。同日記四月一日に『飯島魁発軀す。送りて停車場に至

る』とある。飯島は世界の動物学界の頂点にあったロイカルトについて動物学一般を修業し、とくに寄生虫学を修め理科大学教授となる(一八八七)。

この年大著『人体寄生動物編』を公刊、その『擴節裂頭條蟲』の項で『——余去ル明治十九年東京市場ニ来ル所ノ鱒(多クハ利根川産ナリ)数尾ヲ取り詳細ノ驗查ヲ下シタルニ其筋肉中ニ果シテ幼條蟲ヲ發見セリ其形状ハブラウン氏ノ記載スル所ト毫モ違フナキヲ以テ其裂頭條蟲ノ幼蟲ナルヲ知レリ余ハ其幼蟲數個ヲロイカルト氏ニ送り歐洲ノモノト比較サレンヲ請ヒタルニ毫モ相違スル點ナシトノ答ニ接シ尚ホ其事ヲ確定セン為ニ余並ニ余ガ助手菊地松太郎氏ハ彼ノ幼蟲ヲ嚙下シ裂頭條蟲養成ノ試験ヲ行ヘリ今左ニ之レガ記ヲ掲グ——』とある。

まさに稀有なる自家実験で、他の追隨を許さぬ所である。飯島は日本における寄生虫学分野で『大複殖門條蟲』(一八九二)、『芽殖孤虫』(一九〇五)の新記載、肝吸虫の一種説、また、日本住血吸虫発見の桂田、藤浪らへの助言等、その功績は枚挙に遑がない。

一八七六年ベルツが東京大学で内科学の教授を開始、

彼は来日早々患者からミクロフィリアを検出し糸状菌の存在を指摘、また、糞便検査で鉤虫卵を証明、鞭虫の存在を指摘、更に人の喀血中に世界で最初に肺吸虫を認め、寄生虫の知見を一挙に広めた。この薰陶を受けた当時の学生達の中から、寄生虫学の発展に寄与した学者を卒業順に挙げると(ベルツ派)、中濱東一郎(明治一四)、三浦謹之助(明治二〇)、山極勝三郎(明治二二)入澤達吉(明治二二)、宮入慶之助(明治二三)、藤浪 鑑(明治二八)らである。彼らは寄生虫学を専門とせず、病理学、衛生学、内科学を専門とした。後年、三浦、入澤、山極は東京派、藤浪は京都派、宮入は福岡派に分かれ斯界の発展に寄与した。

一方、飯島魁門下から寄生虫学を専門とする逸材が次ぎのように卒業誕生した(飯島派)。五島清太郎(明治二三)、宮島幹之助(明治三三)、吉田貞雄(明治三九)、小泉丹(明治四一)、小林晴治郎(明治四二)、森下 薫(大正一〇)らである。五島は飯島の直系後継者で第三回帝国医学士院賞の授賞者であり、宮島は伝染病研究所寄生虫部門(のち北里研究所)を担当し、医学以外の出身者で最初の医学

博士となり、後進を指導した。ベルツと同門で明治十年京都療病院に招聘されたシヨイベの寄生虫学分野における功績も評価されねばならない。しかし、滞在期間が短かったので学術的系譜は残らなかった。

一方、岡山で斯界の発展に貢献した桂田富士郎は系譜からみて東京派とみてよい。後半寄生虫学を専門とした横川 定は出身校からして桂田の流れに属するといえよう。

ベルツ、飯島らはいずれもロイカルトの教化を受けているので、日本の寄生虫学の源流はライブチヒ派といえる。この源流に立った飯島は、大正一〇年三月一四日現職で遠逝する。鷗外の『委蛇録』に『遺於菟巾飯島魁死』とある。戒名は文魁院殿真覚玄理大居士、墓は東京駒込染井墓地にある。

(金沢医科大学)